The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	編集後記
Author(s)	
Citation	モンゴル研究. 2013, 28, p. 99-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102392
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

編　集　後　記

◇昨年の夏の原水禁（原水爆禁止 2012 年世界大会・科学者集会）での今岡さんの報告（「モンゴル国におけるウラン開発、原発建設、使用済み核燃料問題」）の一部を見せてもらって以来、『モンゴル研究』にこの問題について載せなければならない、といった思いに取り憑かれた。モンゴル研究会内には、モンゴル核問題研究会ができていて活動していた。例会で二度この問題を取り上げ、モンゴル核問題研究会の方々に話をしてもらった。知れば知るほど、ほっとけない気持ちになった。この問題を掘り下げること、皆に知ってもらうことが必要だと思った。

◇とにかく特集号として、また、拙速を恐れず出そうということで、この春から短期間で編集し、7 月、『モンゴル研究』28 号、モンゴル核問題特集号が形となった。職業や研究対象を異にするメンバーが 1 つの問題に協力して取り組む過程は、長年『モンゴル研究』の編集・製作に関与してきたが初めての経験で、研究会の底力を感じた。

◇さらに、編集会議での会話から開催へ至った緊急勉強会は、有益な貴重な時間となった。

◇現在進行形のこの問題、継続して取り組み、深化させることは勿論、その都度、何らかの形で提示していくことになる。忍耐強くありたいと思う。（る）

◇「モンゴル研究」も 28 号を数えることになりました。この特集号は、研究会が大切にしてきたものがよく出ていると思います。

◇アリオンボルドさんの話の中で、主人も客も不安を抱えながら、「肺に黒いものがあったり、白いものが他の臓器にあったり」する山羊や、乳を入れた茶を、不安を抱きつついただく話は衝撃的でした。客に供した山羊は、大量生産の名も無き一頭ではありません。ともに暮らし育ててきた、他にはいない山羊なのです。主人自ら屠殺するわけですが、もちろん無造作に屠殺できるわけはありません。その山羊を客はいただく、いや、主人も客もいただくわけです。それを不安を抱えながらいただかなくてはならないとは…。原因は未だ特定はされてはいませんが、大地を汚染するとはこういうことなのだということがひしひしと伝わって来ました。水俣病の場合は猫であったと…。

◇これからも、核問題だけではなく、今までよりさらに多様に、モンゴルの大地や人々の営みから学び、この世界の中で、この社会の中で生きていくこととしっかりと結びついた研究でありたい。「苦しみも未来もともに」できる研究でありたいと思います。（周）